

[ 情報名 ]

寒冷紗被覆によるかんきつ「カラ」のす上がり及び落葉の防止

[ 要約 ]

早春に収穫される「カラ」を、パイプハウスを利用して保温性のある寒冷紗で10月から収穫期まで被覆することによって、果実品質に影響することなく、す上がり果の発生を軽減し、冬期の落葉も軽減できる。

[ 機関 ]

三重県科学技術振興センター・農業技術センター・紀南かんきつセンター・かんきつ担当

[ 連絡先 ]

05979-2-0008

[ 部会名 ]

果樹

[ 専門 ]

栽培

[ 対象 ]

果樹類

[ 分類 ]

普及

[ 背景・ねらい ]

かんきつ「カラ」は、高品質の晩生品種であるが、その果実は4月中旬から5月上旬にかけて収穫されるため樹上越冬をしなければならず、低温・寒風によるす上がり果の発生や落葉が栽培上問題となっている。そこで、保温性のある寒冷紗(K社製, HB-1, 透明, 透光率90%)で、10月から収穫期まで被覆することによって、低温・寒風による被害を回避し、安定生産を実現することを目的とした。

[ 成果の内容・特徴 ]

1. パイプハウスを利用して寒冷紗で樹体を被覆することにより、気温は露地より高くなり、低温時でも約2℃高い(図1)。
2. 被覆することにより、す上がり果の発生が少なくなり、被害程度も軽くなる(図2)。
3. 被覆することにより、冬期の落葉を軽減することができる(表1)。
4. 被覆することにより糖度はやや高くなるが、果皮色、クエン酸濃度にはほとんど影響がない(表2)。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1. 「カラ」の安定生産のため、冬期の低温・寒風害回避技術として利用できる。
2. 果実袋かけの労力が不要となり、同時に鳥害を防ぐことができる。
3. 本試験はパイプハウスでの結果であるが、簡易な平棚施設への活用も考えられる。

[ 具体的データ ]

図1：低温記録日における気温の推移

図2：保温性のある寒冷紗被覆がす上がり果の発生に及ぼす影響(平成8年)

表1：保温性のある寒冷紗被覆が冬期の落葉に及ぼす影響(結果枝単位)

表2：保温性のある寒冷紗被覆が果実品質に及ぼす影響(平成9年4月15日調査)

[ その他 ]

研究課題名：優良中晩柑の栽培体系の確立(「カラ」の施設化による高品質安定生産技術の確立)

予算区分：県単

研究期間：平成10年度(平成8年～9年)

研究担当者：市ノ木山浩道、鈴木賢